

著：大原 國章

大原アトラス2 皮膚付属器腫瘍

書評者：玉田 康彦(玉田皮膚科)

本書は皮膚付属器腫瘍全般に涉って網羅されており、臨床と組織を対応させてわかりやすく解説されている。さらに他科領域の病変(部位特異的)や内臓癌の皮膚転移まで言及され、筆者の臨症経験の豊富さが窺われる。

序論のなかで筆者は「臨床情報からどこまで診断に迫れるかその訓練を常に行っていれば、いつか必ず良い報いがあります」と述べられており、問診、視診や触診の重要性が強調されている。そしてそれぞれの項目に特徴的な疾患群が記載され、本書ページも併記されているので見やすくて便利である。さらにダーモスコピーや超音波の画像を駆使して臨床診断を導きだす手順を詳しく教示してくれている。

皮膚付属器腫瘍の病理に関しては国内外で多数の教本が出版されているが、その多くは腫瘍の分化の方向と成熟度によって分類されている。本書はそれらと若干趣きが異なり、臨床および組織像の特異な形態を重視している。同一疾患でも多数の症例を供覧して、さまざまな形の変化を提示している。

I] 毛包腫瘍では、1) 角質嚢腫を形成するもの、2) 毛芽構造を呈するもの、3) 毛包性角化を示す突出性結節の3パターンに分類している。毛包角化を呈する外毛根鞘腫およびその悪性型 counter-

part で表皮内癌の多い悪性外毛根鞘腫(MT)、そしてMTおよび増殖性毛包性嚢胞で真皮、結合織に浸潤がみられるもの、*de novo*に毛組織から発癌するものを毛包癌と総称している。毛包に関連する癌の病名はいまだ混沌としているが、毛包癌と一括しているところはクリアカットでわかりやすい。

II] 脂腺系腫瘍では脂腺の正常組織、Fordyce's condition、脂腺増殖症と脂腺腺腫の違い、脂腺細胞の分化の程度に応じて脂腺腺腫、脂腺腫を区別している。脂腺分化を示す脂腺癌は眼瞼に好発するが、乳房部や脂腺母斑に生じた症例も供覧されている。切除範囲に制限のある眼瞼の脂腺癌では再発率が高く、境界鮮明で組織像も高分化型の病変でも小範囲切除の場合には1年半後に再発をしていることから、治療の難しさが推察できる。

III] 汗腺腫瘍では、1) 液性嚢腫を形成するエクリン汗嚢腫など、2) 真皮内の汗管増生を来す汗管腫など、3) Poroid cells, cuticular cells、管腔構造が主体をなす汗孔腫、汗孔癌など、4) 乳頭状増生を示す乳頭状汗管嚢胞腺腫、5) 汗腺の分泌部(筋上皮細胞と分泌細胞)への分化をしめす皮膚混合腫瘍、6) 螺旋状、階層状の増殖する螺旋腫、螺旋腫癌、7) 汗腺癌としてアボクリン汗腺癌、

皮膚粘液癌、腺様嚢胞癌、微小嚢胞性付属器癌に分類されている。

汗孔腫は臨床の場でしばしば悪性腫瘍と間違われることがある。Poroid hidradenoma、汗孔癌を含めると40例を超える汗孔腫の多彩な臨床像は圧巻であり、診断に困ったときの良いアトラスである。また汗腺系の悪性腫瘍の疾患名、分類は確立していないが筆者は汗腺癌と包括しており理解しやすい。

他科領域の病変では milk line に沿ってできる部位特異的腫瘍、子宮内膜症、側頸嚢胞や陰茎縫線嚢腫など皮膚付属器腫瘍との鑑別を要する疾患である。また内臓癌の皮膚転移では皮膚原発の汗腺癌、有棘細胞癌なのか、内臓癌の皮膚転移なのかの判断のポイントを症例を挙げて提示している。

このように本書は付属器腫瘍の臨床像、組織像およびダーモスコピーや超音波の画像を含めてその全体像を把握することができる。また同一疾患でも多数の症例が提示されており、総合させ診断にも役立つことから初心者からベテランまで鏡検時いつも手元に置いておきたい教本のひとつである。

● B5 頁400 2015年
定価：本体14,000円＋税
[ISBN978-4-7809-0913-5]
学研メディカル秀潤社刊